

実践報告 (Report)

友達と関わりながら自然に関心をもたせる生活科学習

—自然遊園地作りの実践を通して—

Seikatsuka learning, A Living Environmental Studies in Japanese Elementary School, arousing the interest in nature with friend-ship: Through practice made with a natural amusement park

柴田 真介*
SHIBATA, Shinsuke*

摘 要

名古屋市立植田南小学校は、高層マンションが立ち並び、車も激しく行き交う学区に位置する。筆者は自然に乏しい都市部の児童が自然に関心をもっているのか、自然の中で遊んでいるのか疑問に感じていた。児童へのアンケート調査の結果、自然離れが明確に示された。このような児童に、いきなり自然ばかりの場所に連れて行ったところで活発な活動になるとは考えにくく、段階を経た自然体験活動を生活科で実践した。まず遊具が多い公園、次に遊具が少なく木が多い公園、そして山の自然が多く残っている公園と少しずつ自然の多く残る場所に連れて行った。この実践によって、自然に関心を持つ児童が増えたが、一部の児童は、校外では自然の中で遊ぶという段階には至っていなかった。このような児童の活動を調べてみると、一人遊びが多かった。そこで、次の実践では、友達と関わりながら自然と関わらせることを意図して、稲葉山公園に自然遊園地を作って遊ぶことにした。児童自身で計画を立てたことで、自然遊園地作りの見通しをもたせることができ、友達と協力することの楽しさや良さに気づき、様々な自然を見付けることができた。

キーワード：生活科、自然、遊び、友達との関わり

Key words : Seikatsuka (Living Environmental Studies), nature, play, friend-ship

1. はじめに

「蔓で三つ編みを作るのが固くて難しかったよ。でも〇〇ちゃんとやったらできたよ」、「障害物競走をしたよ。落ち葉の上にドッスンと転んだらふかふかだったよ。気持ちよかったよ」、「ファミコンで遊ぶより、みんなと稲葉山で遊んだ方がおもしろいよ」、「今度お母さんも稲葉山で遊ぼうね」。これは、児童が稲葉山公園に『自然遊園地』を作って遊んだ後の感想である。児童は、友達と一緒に自然の中で遊ぶことの楽しさを体感し、自然に関心をもち始めたことが分かる (写真1)。

本実践を行った名古屋市立植田南小学校 (以下、本校と略する) は、高層マンショ

* 名古屋市立如意小学校

* Nyo Elementary School, Nagoya City, Aichi, Japan

(紹介教員：野崎健太郎、椋山女学園大学教育学部)

ンの立ち並ぶ学区で、その中央には地下鉄が走り、その上には県道56号線を車が激しく行き交っている。こうした学区の状況の中、筆者が担任である第1学年の学級（以下、本学級と略する）の児童は、36名中28名（約78%）がマンション住まいであった。筆者は、「この子たちは、“自然”に関心をもっているのだろうか」、「“自然”の中で遊んでいるのだろうか」、という疑問をもった。そこで、平成7年（1995年）5月22日～28日の間に、本学級の児童に、虫取りや草花遊び、泥遊び等、1週間で、「自然と関わって遊んだ日数、および人数」を質問紙（アンケート）で調査した（表1）。その結果、一番多く自然と関わって遊んだ児童でも1週間のうち2日であり（3名、約9%）、全く遊んでいない児童（0日）は23名（約65%）もいた。このことから、本学級の児童は日常的に自然と関わっているとは言えないことが分かった。「ファミコンでよく遊んでいる」、「子どもの自然離れが問題となっている」、を知ってはいたが、これほどまでとは思わなかった。



写真1. 自然遊園地で障害物競走をする児童

表1. 1週間に自然と関わって遊んだ日数と人数
(1995年5月22日～28日に調査)

自然と関わって遊んだ日数 (日)	人数 (人)
0	23
1	9
2	3
合計	35

2. 1学期の実践（自然遊園地作りの実践に至るまでの経過）

【無理なく自然の中での遊びへ】単元名【あそびにいこうよ】

平成7年（1995年）6月に実践を行った。筆者は、自然体験が乏しい児童を、いきなり自然ばかりの場所に連れて行ったところで活発な活動になるとは思えず、井口公園（遊具が多い）→欠下公園（遊具は少ないが木は多い）→稲葉山公園（山の自然が多く残る）の順に、少しずつ自然の多く残る場所に連れて行くことにした。最初は遊具でしか遊んでいなかった児童も、「先生と虫取りしよう」、という私の言葉掛けで少しずつ遊具以外のものにも目が向くようになり、草花で飾りを作ったり、虫を探したりするようになった。そして、稲葉山公園では山の中を走り回って遊ぶ姿が見られた。

本実践後、6月24日～30日に再び質問紙調査を行い、その結果を表2に示した。実践前は「1日は自然と関わって遊んだ」児童が12名（約35%）であったのに対し、実践後は19名（約56%）になった。そして「1日も自然と関わって遊んでいない」

という児童は23名（約65%）から15名（約44%）に減った。実践後も自然と関わる遊びが見られない15名の児童は、授業では楽しく自然の中で遊んでいるが「家でも自然の中で遊ぼう」と思うほどには自然に関心をもっていないのである。この15名の児童が自然に関心を持ち、自然と関わった遊びをするようになることが課題として残った。そこで、2学期の実践では、15名のうちの一人、A児についてその活動の様子を追い掛けていくことにした。

表2. 1学期の実践後に調べた1週間に自然と関わって遊んだ日数と人数 (1995年6月24日～30日に調査)

自然と関わって遊んだ日数 (日)	人数 (人)
0	15
1	9
2	4
3	3
4	2
5	1
合計	34

3. 2学期の実践（自然遊園地作りの実践）

【友達との関わりをもった自然の遊びへ】

1学期の実践での児童の様子を見ると、とりわけ自然にあまり関わりをもっていないA児を含めた15名の児童は、虫と自分、草と自分、というような一人遊び的なものが多かった。筆者は、「一人遊び的、というところにA児を含めた15名の児童が、自然にあまり関心を持っていない原因があるのではないか」と考えた。そこで、2学期の実践では、友達と関わりながら自然体験活動をさせることにした。そうすることによって、友達と一緒に教えて合ったり認め合ったりする中で1学期の実践にはなかった楽しさを味わうとともに、自然に関心をもつことができると考えた。そして、1学期の実践で自然に関心を持ち始めている児童にも、友達と関わりながら自然で遊ぶことで、1学期の実践からの広がりもできるものと考えた。具体的には「自然遊園地作り」で実践することにした。実践は10月末～11月上旬に行った。

活動計画

児童は、2年生の生活科で行われた「お祭り」に参加し、「お店」で遊ばせてもらうことで、「ぼくもお店を作りたい」と願うようになる。そこで、「稲葉山に自然遊園地を作ろう」と児童に投げ掛け、活動を促すことにした。

①自然遊園地の計画を立てよう（実践2-1）

グループごとで、どのような遊びを作るか話し合い、絵に表す。今までの自然と関わって遊んだ経験をもとに話し合い、完成予想図を絵で表させる。そうすることにより、「どういうものを作ろうとしているのか」、「そのために必要なもの（蔓やオナモミなど）は何か」、「必要なものはどこにあるか」、がはっきりし、自然遊園地作りの見通しをもたせることができる。

②自然遊園地を作ろう（実践2-2）

完成予想図に従い、友達と協力しながら自然遊園地を作る。そして、稲葉山公園の自然を生かした場所に店を作る。学校での友達と協力した自然遊園地作りでは、（友達と蔓を持って、蔓を切るなど）協力して作ることの楽しさや良さに気付くことができる。また、稲葉山公園での場所決めでは「遊びを達成する」という目的のもとで、地形や樹木などの「自然」を見付けることができる。

③自然遊園地で遊ぼう（実践2-3）

友達との関わりをもち、遊びの工夫や新たな問題の解決をする中で自然を見付ける。自然遊園地で遊ぶ中で、友達にやり方を教わったりほめてもらったりするなど、一人遊びにはなかった楽しさやうれしさを味わうことができる。また、遊び方を工夫したり、遊んでいて気付いた問題を解決したりする中で、「自然」をより見付けることができる。

実践結果と考察

2年生の「お祭り」には、的あてや輪投げなどがたくさんあり、児童にとってまさに「遊園地」であった。教室に戻ると、A児を含めどの児童も興奮した様子で「ぼくも作りたい」、「もう1回遊びたい」と話していた。そこで話し合いの結果、稲葉山公園に「自然遊園地」を作ることになった。児童は、1学期、2学期と稲葉山公園や天白川で遊んだ経験や、2年生の「お祭り」に参加した経験から、右の7つのグループで自然遊園地の「店」を作ることになった（表3）。A児は、仲良しのT児のいるターザンを選んだ。

表3. 児童が「自然遊園地」に作った店
(*A児が選んだ店)

グループ	自然遊園地の店
1	蔓を利用したターザン*
2	オナモミの的あて
3	木の枝を利用した輪投げ
4	どんぐりの宝探し
5	自然のもので作ったおもちゃ屋さん
6	ダンボールで滑るジェットコースター
7	自然を利用した障害物競走

実践2-1. 「自然遊園地の計画を立てよう」

計画を立てようとするが、以下のターザンのグループのように、「何を決めたらよいか」が分かっていないグループがあった（写真2）。したがって、そのようなグループに対して、筆者は、「的はどうやって作るの」、「宝は何にするの」など話し合いをさせる支援を行った。

A児のいるターザンの活動の様子

C児：何を決めればいいの？

T児：ロープは何にするの？

C児：紐でいいんじゃない。

C児：自然遊園地だから他にないかな？
 C児：天白川にあった蔓はどう？
 A児：弱くない？大丈夫？
 C児：〇〇ちゃんみたいに三つ編みにしよう。



写真2. ターザンをつくるための話し合いをする児童

どのグループも「自然遊園地を作ろう」ということで、できる限り草や実などを使おうとする意見が出されていた。そして、設計図をかい

た後、「先生あのね」という題目で感想を書いた。以下に感想の一部を紹介する。

- 感想1：**ターザンを作ろうとしたんだけど、なかなか決まらなかったんだよ。T児が「蔓でやったらどう」って言ったらみんながいいよって言ったよ。おもしろい遊園地ができそうだよ（A児）。
- 感想2：**最初は どうやって作るか分からなかったけど、だんだん分かってきて工夫ができてきたよ。（中略）……楽しみでたまらないな（輪投げ）。
- 感想3：**宝探しをみんなで話し合ったよ。（中略）……ドングリを宝にしていろいろな色で塗るよ。おもしろかったよ。

A児は、当初、「蔓で作ったロープは弱い」と考えたが、「三つ編みにしようか」という意見で「できるのではないか」と考えたようである。そして、「おもしろい遊園地ができそうだよ」と感想にあるように、「自然のロープ」で作る自然遊園地がとても楽しみになっていったようである。

この実践で、「ドングリに色を塗って点数を付けよう」「木の枝に輪を掛けよう」等、「自分たちはどのようなものを作りたいか」をはっきりさせていた。また、「オナモミの的あてはタオルを使おう」等、「遊園地作りに必要なものは何か」をはっきりさせていた。どの児童も、自然遊園地作りの見通しをもったようである。感想に「最初は どうやって作るか分からなかったけど、だんだん分かってきて……」とあるように、話し合うきっかけを与えるなどしているうちに、少しずつグループ内で計画を立てることができるようになってきた。また、「蔓でやったらどう」「ドングリを宝にして……」など、自然遊園地の名にふさわしくなるように自然のもので作ろうとしており、工夫していることが分かる。そして、グループで計画を立てたことで、「ドングリを宝にする」「蔓を三つ編みにして使う」など、自分1人では気付かなかった考えを知り、友達のすばらしさや自然の仕組みのおもしろさに気付くことができた。「楽しみでたまらないな」「おもしろい遊園地ができそうだ」と感想にあることから、この話し合いがとても楽しく、自然遊園地に対する期待がとても大きいことが分かる。

この後、児童は、グループごと計画に従い天白川や公園などで「自然遊園地」の材料を集めた。

実践2-2.「自然遊園地を作ろう」

A児のいるターザンの活動の様子

C児：固くて三つ編みにできないよ。

そっちもってくれる？

A児：本当に固いね。でも頑張ろうね。



写真3. ターザンのロープをつくる児童。「かたいね」との会話が出た。

A児の参加するターザンは、グループで協力して蔓を切ったり、編んだりしていた(写真3)。しかしながら、いざ作ろうとしても、いったい何から作ればいいのか分からない児童

もいた。その時、オナモミの的あてグループのS児が「ぼくたち2人での的を作るから、看板を作ってね」と言い、グループ内で手分けし始めた。このやり方をほめると他のグループも手分けするやり方を知り、早速、「私は輪を作るから、点数の紙を作ってね(輪投げ)」、「私たちがジェットコースターを一つ作るから、もう一つ作ってね」というように手分けし始めた。また、ターザンのグループのように、作っている途中、どうしても1人でできないところがあると、「蔓を持っているから切ってくれる？(おもちゃやさん)」、「(段ボールを)ガムテープで付けるから手伝って(ジェットコースター)」等、友達に手伝ってもらうように頼み、協力しながら作ることもあった。以下に感想の一部を紹介する。

感想1：三つ編みが難しかったよ。でもみんなでやったら早くできたよ(A児)。

感想2：(グループで)話し合って、私と〇〇ちゃんて輪投げの輪を作ったよ。(中略)

……頑張ってやったらおもしろくなったよ。早く月曜日になってほしいな。

感想3：おもちゃをたくさん作ったよ。力を合わせて頑張ったよ。みんなたくさん来てくれるといいな。

A児は、最初、自分が何をしたらよいか分からず、友達をやっているのを見るだけであった。しかし「(かたくて三つ編みにできないから)そっちもってくれる」と頼まれたことで作ることに参加することができた。そして蔓が「かたい」ことを知るとともに、感想に「みんなでやったらできたよ」とあるように協力することの大切さも知ることができた。「(グループで)話し合って、私と〇〇ちゃんて輪投げの輪を作ったよ」とあるように、7グループすべてが手分けをして自然遊園地を作っていた。そして「力を合わせて頑張ったよ」とあるように、A児をはじめどの児童も「自分一人だけでなく、友達といっしょになってやったからできたんだ」と感じていた。このように児童は、「自然遊園地で遊ぶ」という目標に向けて、手分けしながら協力し、試行錯誤しながら自然遊園地を作っていた。自然遊園地への期待感「早く月曜日になってほしいな」、「みんなたくさん来てくれるといいな」という言葉からも窺える。

A児のいるターザンの活動の様子

C児：どこにしようか？

C児：高い枝ばかりだね。

C児：この枝は低いけど細いね。

A児：この枝はいいけど、ターザンをするとこの枝にぶつかるね。

C児：この木がいいんじゃない？ 低くて太くて安全だよ。

ターザンのグループだけでなく、どのグループも、稲葉山公園での場所決めになるととても迷っていた(写真4)。輪投げのグループでは、児童の背の高さに合う枝がなかなか見付からない。見付けたが、向こう側が崖になっているため、輪がそれると崖の下に輪を取りに行かなければならない。的あてのグループでは、秘密基地であったところに作ろうとするが、崖の下であるために行きにくく、しかも分かりにくい。障害物競走のグループでは、「坂を走ろう」、「枝のトンネルを通ろう」、「次はどこに行こうかな」といった会話が見られた。以下に感想の一部を紹介する。



写真4. ターザンのロープをかける木の枝を探す児童。
「低くて太い枝はないかな」との会話が出た。

感想1：ターザンなんだけど、木にぶら下がるところが見つからなかったんだ。やっと見付けたと思ったら、木がでっかすぎたんだ(A児)。

感想2：オナモミの的を引かける場所を探すのが難しかったよ。すごく探したらいいところを見付けたよ。

感想3：輪投げの木を探すのが難しかったよ。

A児は、「やっと見付けたと思ったら、木がでっかすぎてできなかつたんだ」とあるように、稲葉山公園を歩き回るが、なかなかターザンをするのにちょうどよい木を見付けることができなかった。A児は、高い木や低い木、太い枝や細い枝、稲葉山公園にあるいろいろな種類の木の中から、ターザンをするのに適した木を探していた。A児のいるターザングループと同じように、どのグループも「場所を探すのが難しかった」ようである。しかし、この「探す」活動こそが自然を見付ける活動である。この探す活動によって、「木の大きさ」、「枝の伸び方」、「崖の有無」、「坂の角度」、「石や葉の量」などの自然を見付けることができたのである。とりわけ自然に興味をもっていない児童にとって、この「自然を見付ける活動」は、今までに経験したことがない活動であった。「自分の考えた遊びを達成する」という目標を通して「自然を見付ける」ことができた。

実践2-3. 「自然遊園地で遊ぼう」

A児のいるターザンの活動の様子

C児：きつく持ってやるんだよ。

C児：ふわーっとして気持ちいいね。

A児：枝の上の方からするとおもしろいよ。

C児：こわくない？



写真5. ターザンで遊ぶ児童

「オナモミの的あてで10点取ったから、松ぼっくりもらったよ」、「ジェットコースターこわかったけど、すごくおもしろかったよ」等、A児をはじめどの児童も「自然遊園地」での遊びをとっても楽しんでいた(写真5)。また、「景品がなくなったから、虫を捕りに行こうよ(輪投げ)」、「ここは風が強いからお客さんが来ないんだ。別の場所に移ろう(おもちゃ屋さん)」等、新たに出てきた問題にも進んで解決しようと取り組んでいた。そして「体を後ろにするとスピードが出ておもしろいよ(ジェットコースター)」、「障害物競走で転んだけど痛くなかったよ。落ち葉でふわふわだったよ」など新たな工夫や自然への気付きがみられた。以下に感想の一部を紹介する。

感想1：今日、稲葉山に自然遊園地を作って遊んだよ。私はターザンなんだけどいっぱい人が来てくれたよ。障害物競走は枝のトンネルがあったよ。枝が横にビョンビョン出てたよ(A児)。

感想2：こういう店があったよ。木に蔓を巻き付けてビュンと飛んでいくんだよ。「上手だね」って言ってくれたよ。

感想3：ジェットコースターを2回もしたよ。こけたけどおもしろかったよ。

A児は、自分たちの作ったターザンに「いっぱい人が来てくれた」ことをとても喜んでいて。また、仲良しのT児が発見した「新しいやり方」を友達に得意げに教えていた。そして、障害物競走では、枝がたくさんありトンネルのようになっていたことにとっても驚いていた。「また遊びたいな」とあるように、A児は、自然遊園地を作って遊んだことがとても楽しかったようである。

「きつく持ってやるんだよ」、「上手だねって言ってくれたよ」とあるように、どの児童も店の人にやり方を教えてもらったり、友達にほめてもらったりするなど、一人遊びとは違った楽しさやうれしさを味わうことができた。また、自然遊園地で遊んでいるときにも、「景品がなくなった」、「お客さんがあまり来ない」等の問題点が出てきた。その時児童はグループで話し合い「(景品になる)虫を捕りに行こう」、「ここ

は風が強いからお客さんが来ないんだ。別の場所に移ろう」など解決に向けて取り組んでいた。「自然の景品を取りに行く」、「お客さんが来そうな風の弱い場所を探す」等、問題を解決する中でも「自然」を見付けていた。同じように「体を後ろにすると（スピードが出て）おもしろいよ（ジェットコースター）」、「枝の上の方からすると（大きく動いて）おもしろいよ（ターザン）」等、「坂の角度」や「枝の様子」等の遊びを工夫する中でも「自然」を見付けていた。「転んだけど痛くなかった。落ち葉でふわふわだった」、「（ジェットコースターで）こけたけどおもしろかった」とあるように、コンクリートとは違う、落ち葉や土の柔らかさに気付いた児童もいたようである。

4. 実践のまとめ

本実践の後、児童は、自然遊園地を作って遊んだことを次のように感想に書いていた。一部を紹介する。

感想1: 稲葉山で遊ぶのって楽しかったよ。またいっぱい稲葉山で遊びたいな（A児）。

感想2: 自然もおもしろいよ。（中略）……ファミコンより稲葉山で遊ぶ方がおもしろいよ。

感想3: 学校より稲葉山の方が楽しかったよ。運動場で遊ぶより楽しかったよ。

感想4: わくわくドキドキしたよ。今度、お母さんも稲葉山で遊ぼうね。

A児の感想にもあるように、どの児童も「稲葉山で遊ぶことは楽しい」と感じたようである。中には「ファミコンより稲葉山で遊ぶ方がおもしろい」と感じた児童や「わくわくドキドキした」児童までいた。そして、「またいっぱい稲葉山で遊びたい」、「お母さんも稲葉山で遊ぼう」というように、この自然遊園地の活動だけでなく、「もっと稲葉山で遊びたい」という記述が見られた。

11月7日～13日には、自然遊園地の実践による教育効果を検証するために、3回目の質問紙調査を行った（表4）。A児は「1学期実践後は0日」であったのが「2学期実践後は3日」になった。クラス全体で1学期実践後と2学期実践後とを比べると、「1日は自然と関わって遊んだ」児童は19名（56%）から28名（88%）に増えた。逆に、「1日も自然に関わって遊んでいない」児童は15名（44%）から4名（13%）に減った。中には1週間のうち6日も自然と関わって遊んでい

表4. 2学期の実践後に調べた1週間に自然と関わって遊んだ日数と人数（1995年11月7日～13日に調査）

自然と関わって遊んだ日数 (日)	人数 (人)
0	4
1	8
2	4
3	10
4	3
5	2
6	1
合計	32

る児童もいた。更に、自然で遊ぶ内容も変わってきた。実践前は「きれいな花を集める」、「虫取りをする」など一人遊び的なものであったが、実践後は「葉やオナモミの投げ合いをする」、「稲葉山で鬼ごっこをする」など友達と関わって遊ぶようになってきた。個人懇談会では、児童の親から次のような話を聞いた。「学校から帰ると1人でファミコンばかりやっていたのに、近頃みんなと外で元気よく遊んでいるみたいなんですよ。『みんなで稲葉山で遊ぶんだ』といって飛び出していくんです」。この実践によって、児童を取り巻く自然が少し近付いたのではないだろうか。筆者は本実践の結論として次の3点を挙げる。

結論1：友達と関わりながら自然遊園地を作って遊んだことにより、A児を含め自然にあまり関心をもっていなかった児童も自然に関心を持ち始め、自然と関わりをもつて遊ぶようになってきた。

結論2：自然と関わりをもつて遊ぶ中で、児童は友達同士で遊びを工夫し、また、「自然を見付ける」ことができた。

結論3：話し合いの中で、自分の意見が聞いてもらえず泣き出す児童がいた。学級経営とあわせ、友達同士の関わり方を大切にしていく必要がある。

今後は、「自分」、「友達」、「自然」との間で望ましい関わりができるような学習を進めていきたい。